

## <論文>物神貨幣から象徴貨幣へ（Ⅱ）：貨幣形成をめぐる現代の論点

著者	岡田 裕之
雑誌名	経営志林
巻	31
号	1
ページ	25-38
発行年	1994-04-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00016048">http://hdl.handle.net/10114/00016048</a>

## 〔 論 文 〕

## 物 神 貨 幣 から 象 徴 貨 幣 へ (Ⅱ)

## — 貨幣形成をめぐる現代の論点 —

岡 田 裕 之

## 目 次

第Ⅰ節	貨幣の謎——問題提起
第Ⅱ節	商品からの貨幣の形成。貨幣＝商品説の根拠
§ 1	マルクスの貨幣形成論
§ 2	メンガーの貨幣形成論
§ 3	一般均衡論における貨幣の形成 〈以上前号〉 〈以下本号〉
第Ⅲ節	現代貨幣における価値実体の欠如。 貨幣＝国定説の根拠
第Ⅳ節	貨幣の水平的基礎と垂直的基礎。 その相剋 〈以上本号〉 〈以下次号〉
第Ⅴ節	象徴貨幣の現代の論点
§ 1	循環貨幣論と代理貨幣論—— 貨幣形態Zは成立するか。岩井 説批判
§ 2	象徴貨幣の言語シンボル同型論 ——現代貨幣の原始的貨幣か らの照射。吉沢説批判
§ 3	正統化暴力による貨幣形成論—— 信用貨幣の両義性と暴力。アグ リエッタ＝オルレアン説批判
第Ⅵ節	現代の象徴貨幣——信用＝中間 構造による両基礎の媒介
第Ⅶ節	貨幣の形成と進化（エボリュージョ ン）。結論と展望
第Ⅲ節	現代貨幣における価値実体の欠如，貨 幣＝国定説の根拠

貨幣＝国定説はこれに対し現実貨幣の率直な事実認識に立つ。現代の現実貨幣の姿態はすなわち

価値実体なき貨幣であり、その国家による貨幣たる通用力の排他的な承認によってたんなる紙片とは区別されるからである。紙幣はこの強制流通力を否定されれば貨幣ではなくなる。<sup>1)</sup> 現代の貨幣は国家表券貨幣 chartal money, state money ないし不換強制流通貨幣 fiat money, である。<sup>2)</sup> ただしここでは前節をうけてなお国家紙幣と現代の不換中央銀行券の区別は捨象する。両者ともに価値実体——効用であれ労働であれ——を欠く貨幣であって直接にはなんらの価値実体をもつものではない、という共通性をもつ。この区別は行論において明らかになるが、ここではただ発行主体が直接に政府である紙幣を国家紙幣とし、発行主体が銀行であって中央銀行が事実上国家機関の一部分に化している紙幣を現代信用貨幣と記述するにとどめる。<sup>3)</sup> 信用を捨象すれば典型的紙幣は国家紙幣である。

この紙幣は貨幣機能を果すことにより商品世界に一般的価値形態を成立させ、交換過程に運動形態をあたえる。統一的価値表現  $xA = 1$  グラムの金,  $yB = 2$  グラムの金,  $zC = 3$  グラムの金等の価値形態のかわりにいまや  $xA = 1$  円の紙幣,  $yB = 2$  円の紙幣,  $zC = 3$  円の紙幣（あるいは1円紙幣  $\times 3$ ）等の価値形態が現れる。諸商品の価値は統一的に、かくて社会的に表現されるが、価値表現の材料は物神的な一定量の金銀ではなくここでは一定単位称呼の紙幣である。商品はここでも直接的に交換されず紙幣に媒介されて全面的に交換される。C（商品）—M（貨幣）—C（商品）の運動である。貨幣＝商品にあつてはこの物、金銀が交換価値のシンボルをなしたが、ここでは価値実体なき貨幣が交換価値という社会的存在のシンボルとなっている。金銀といった物がなぜ交換価値を表現しうるか、というのが物神貨幣論のとくべき謎であつたとすればこの紙切れ、国家の強制的

通用力を背景とした紙片、がなぜ交換価値の象徴たりうるかが象徴貨幣の謎となる。<sup>4)</sup>

かくして貨幣＝国定説はこの紙幣、表券貨幣の事実を直截に認識する学説である。しかも国家の公共行為が単一の貨幣を決定するから多貨幣の可能性と単一貨幣の必然（必要）の相剋という貨幣＝商品説の難点をもたぬ。<sup>5)</sup> もちろん国家はその支配領域を限定された存在である。国定説でははじめから国境をこえた世界的に通用する貨幣は存在しない。その通用力は国境に遮られる。金銀貨幣ではそうではない。しかし金銀貨幣もまた地金の姿態を脱ぎ捨てて一たび鑄貨となれば国民的貨幣となり、その通用力を国境でさえぎられ、世界に出るにはふたたび地金の姿にもどらねばならない。<sup>6)</sup> 国民的通貨の間に外国為替が介入するのは避けられない。<sup>7)</sup>

貨幣＝国定説を定式化したのはクナップである。彼は貨幣現象のうちとくに支払手段に注目し、債務遂行を保証するものは貨幣の金属素材の実質ではなく、幾何の金額かのポンド、ターレル、円等の名目量で契約された債務の期間をこえた同等性を保証するものは、支払手段を認定し債務契約の持続を保証する国家の法制上の行為であるとする。法定貨幣がたとえば銀から金へ、ないしは金属貨幣から紙幣へまたその逆へと変わる際に債務額の連続性が保証されないと商業社会は成立し難いが、債務を決済する時期に通用する国家の定める支払手段による名目金額の同等性、等価性の法的保証が支払いを正当化するのであって、貨幣が金銀素材である技術的な同等性は債務の連続性を保証するものではない、と考えるのである。<sup>8)</sup> また例えば金属鑄貨の額面は磨損なり盗削なりによってその重量実質から背離するが、貨幣において肝心なのは秤量ではなく、その表券的通用力である。表券貨幣＝紙幣こそ十全な貨幣であり、金属鑄貨は未熟な貨幣である。ここで価値単位たる貨幣、支払手段たる貨幣を認定するのは国家の力であり、法制であって、金属の実質ではない。一定重量の金属実質を貨幣たらしめるのは金属を圧延・切断する板金加工の技術であり、社会現象ではない。<sup>9)</sup> あるいは金属正貨は対外支払い用の貨幣にすぎない。かくして貨幣は金属貨幣、ないし商品貨幣の

代替物ではなくシンボルではない。むしろ逆であろう。

だが、貨幣＝国定説は非価値実体の貨幣、表券貨幣の事実を直截に説明するには有効であるが、貨幣のそもそもの形成を問うには貨幣＝商品説に劣っている。ここでは債権債務関係は前提され、鑄貨の流通、かくて商品の全面的流通は前提されている。この説の生命は表券貨幣の完成した貨幣としての直截な認識にあって、貨幣そのものの形成の説明にはない。貨幣＝商品説は貨幣がなによりも交換手段であり、その必然、必要は交換財である諸商品の相互関係から説明されねばならないという信念にたっている。貨幣＝国定説は、国家という社会の政治的統合体から出発する以上、この貨幣形成の当初の必然の説明を欠くという困難を避けられない。<sup>10)</sup> 国民的社会の国家統合が商品流通に関連するのは必然的であるにしてもそこでは商品の流通そのものは前提されていて、むしろ国家がいかに政治的にあるいは法制的に商品の流通にかかわるか、が説明されるべき主題となる。国家は概念的には商品交換から独立しており、歴史的にも商品の流通が先行する。国家はさしあたり商品流通の外部に政治権力的に存在する。かくて、貨幣を必然的に形成せんとする商品の交換社会の展開をうけて、国家は公共用に、あるいは自らのために、貨幣を発行してそれを流通の外部から投入するから、国家紙幣にあってはその投入の動機とそれが流通世界に受容される根拠がまず示されねばならない。

表券貨幣（非価値実体貨幣）の事実と、貨幣を要請し生み出す商品世界に内存する傾向——貨幣形成の必然——の関係を探るために、国家による独自の動機からする紙幣の流通外部からの投入がいかにして流通に受容されるかを考察しよう。それは貨幣の形成と進化の複雑な諸契機を浮かびあがらせるであろう。

国家による紙幣の発行（投入）ないし特定金属貨幣の本位認定は国民的幣制統一の国家本来の正常業務であるといえる。もちろんそのためには商品流通と貨幣の使用がある程度発展している歴史的状況が前提されるが、ただし幣制統一が商品流

通の正常な進行に不可欠であり、しかも多貨幣の可能性と単一貨幣の必然（必要）の相剋は商品世界それ自体では解決不能であるし、経済圏の国民的統一とその掌握は国家の政治的支配にとっても望ましい事柄である、からである。国家はこの統一によって公共の利益にそう行為を行い、もって支配の正統性を誇示できるし、商品社会はこれをすすんで受容するであろうからである。貨幣、とくに紙幣は“財”とは言い難いが、統一的貨幣制度の供給は一種の社会の公共財供給に擬しても議論の便宜上差し支えはない。<sup>11)</sup>

とはいえ、国家による紙幣発行の動機と根拠にはより直接的な経済的要因がある。つまりそこには、国家と経済が徴税により不可分に結びつく、という支出（歳出）を徴税（歳入）によって賄う古代から現代にいたる官房学的関連が決定的に存在する。国家紙幣の発行は商品流通の正常な進行にかかわるよりはまずは、国庫収入の確保の動機にかかわり、国家の徴税権限、歳入獲得の強制力の発現に立脚する。貨幣＝国定説において見るべきは紙幣発行、一般に造幣高権、商品の交換という等価交換を媒介する貨幣の発行、がその背後における不等価交換、国家による一方的財貨の取得（強奪）を隠している、ということである。クナッブにとっても、ケインズにとってもこれは決定的な事柄ではなかった。貨幣＝商品説のかくされた困難が多貨幣可能性と単一貨幣の要請の相剋にあるとすれば、貨幣＝国定説のかくされた意味は等価交換の不等価交換による媒介のパラドクスである。<sup>12)</sup>

もっともこれは国家による再分配機能によるもので歳入を公共財供給にあてるか、所得移転にあてるならば、収奪というよりは社会の一つの安定化行為、国家の公共行為と評価できるが、この公共行為と収奪が重なり合い、無区別となりついに収奪に帰着するのは国家行政当局に納税者側からの制限が利かなかった諸時代に普遍的な傾向であった。そこでは社会の予備形成、行政裁判費用等の弁済よりは国王、軍隊の奢侈、侵略、膨大な官僚群の扶養等の出費が基本となり、そのための徴税限界を紙幣発行によって克服する動機が恒常的に働く。

そこで思弁的な図式であるが、国家紙幣の発行

はつぎのような現物徴税票の発行と回収に根拠をもつ、と考えたらよいだろう。

$$\begin{array}{ccc} \text{SM} & - \text{P}(\text{T}) & \text{SM} \\ & \times & \nearrow \\ \text{P}(\text{T}) & - \text{SM} \cdots \cdots \text{SM} & \end{array}$$

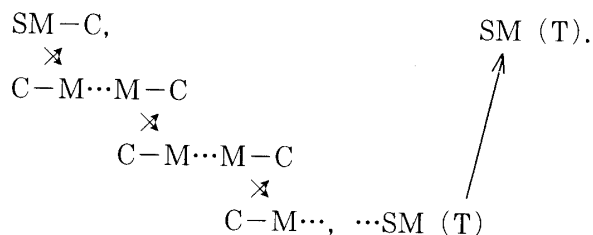
SM は国家紙幣を、P (T) は現物税を示す。

国家はここで現物税徴収に代わり国家紙幣を発行し、それによって現物税相当の財貨を獲得する。ただしこの財貨引き渡し請求は単純な「強奪」ではなく後日その徴税票 SM の提出をもって納税として国家は受取る義務を負う、というメカニズムの内部にある。<sup>13)</sup> 国家はこの調達様式により社会的分業編成を利用して必要な現物財貨を随時に取得することができ、財貨所有者は先払いの納税として財貨の引渡に應ずることが出来る。官僚群を含む国家（中央・地方の）はそれ自身古代、中世における国民的な消費の一大中心であった。それは当初は現物税の分配により存続しえようが、やがて社会的分業が発展すればこれまた社会的素材交換の中心たらざるをえなくなり、財貨請求権証を発行せざるを得なくなる。そして随時に必要とする諸財の入手は国家の現物税徴集権に依拠するほかはない。ここに現物税の貨幣税への発展の必然が存するのだが、紙幣の発行はこれを国家みずからの発意で行いするのである。ただしこれは貨幣発行の独自の契機であって、商品世界が自然発生的に必要とする貨幣形成にとって代わるものではない。

だが、現物税徴集票の交付と回収だけではそれは国家紙幣とはならぬ。それはなお商品流通を媒介しない。徴税票が貨幣に転化するにはそれは流通内部にはいりこまねばならない。そしてある程度まですでに商品が流通している社会では、国家から財貨と引き替えに交付されたこの徴税票が、最初の受取人から彼が国家に引渡しした財貨ないし商品の同一の価値額の商品を支配する購買力として働いて、つぎの商品所有者の手にわたって物品貨幣の代替物の役割を果たしうる条件が存在する。この紙幣はすでに物品貨幣の使用価値制限を脱却しているからである。あるいはまたすでに金属貨幣が流通していたにしてもそれに代替することも可能である。当該国家の正統支配を受容している

ならば国民たる商品所有者はみずから所有する商品価値相当の対国家支払手段、納税手段を受取るからである。そうならば国家は必要な財貨、商品を紙幣によって購買し、それが流通手段となって流通内部に入りこみ、納税者がそれを国家に支払うまでは紙幣は流通内部に留まるであろう。国家投入の徴税票はここに貨幣に、国家紙幣に成長する。<sup>14)</sup>それは流通手段たるがゆえに貨幣となり一般的等価票（＝章標、シンボル）となる。

上の図式は次の図式になる。



Cは商品、Mは貨幣で、SM (T)は紙幣での徴税、貨幣税を示す。

現物税の貨幣税への発展は商品流通の発展に照応するが、貨幣税はまた商品流通のいっそうの発展をもたらす。

国家紙幣はかくて国民、流通界からすれば不等価交換の動機（徴税動機）からして発行されるが、流通内部にはいりこめば購買手段、流通・支払手段に転化して流通器械に代替する。紙幣の発行量が正統支配が可能とする現物税による財貨徴集範囲にとどまるならば、この発行＝収奪はさもなくば必要な流通器械の代替を生み出すだけであろう。もし金銀銅等の金属貨幣が流通器械であったとすれば、その分量の金属が生産なり消費に振り向けられうることとなり、国家がその分の財貨を社会から追加的にひきあげても格別の抵抗は生じない。それは紙幣発行にかかわる国家の追加的な財源となる。

しかしながら、より一般的に言えば、紙幣は金属貨幣の流通における自生的かつ社会的な象徴化に基礎をおくものである。商品貨幣は概念的にも歴史的にも国定貨幣に先行する。

金銀あるいは銅が貨幣の位置につき一般的等価物になったとしよう。一般的等価物はむろん商品体をとる金銀等である。ただそれが価値尺度機能に照応した素材をもち分割、合体容意である、と

いう使用価値特性をもつというのが貨幣の位置に立つ蓋然性を高めたのだ。さらに流通手段機能、価値保蔵機能まで考慮すれば携帯便利（小量で大きな価値を担う、他）、耐久性、保存性（腐敗、変質を免れる、他）との性質も追加できよう。ともあれさまざまな価値額の商品の価格を実現しつつ持手を転々とする流通手段＝貨幣は地金銀のままでは流通しがたい。地金銀の一定質量の貨幣片への切断加工は避けられず、かつまたその貨幣片の相互の量的区別が必要となり、単位称呼の貨幣片が大量に製造されねばならなくなる。当初は貨幣片の秤量が行われかつ巨額の取引では秤量が行われざるをえなかったであろうが、商品流通がかくてまた貨幣流通が盛んになり活発化し普段のものになればなるほどこの貨幣片は統一的な質（純分）と量（重量）を保証されてただ数を数えれば取引が円滑に進行するものとならねばならぬ。小額取引のたびに金属の純分・重量を検査していたのでは流通をはなはだしく妨げる。せっかく金銀銅を貨幣に帰着せしめたのもそれでは効果に乏しい。地金銀は鑄貨に発展する。最初は商人集団ないしは鉱山業者が鑄貨を私的に鑄造したであろうが、貨幣の鑄造はやがて造幣高権として国家に吸収されてゆく。この造幣高権の成立自体鑄貨における金属貨幣の象徴化プロセスに緒をおくものである。<sup>15)</sup>

鑄貨の象徴化の自生的過程は秤量（コスト）の回避・節約と物理的磨損である。鑄貨はいかに質量どおりに鑄造しても流通過程で磨損が避けられない。磨損はかくて鑄貨の額面価値、通用価値と実質金属重量の乖離をうむ。これは価値尺度商品の自己矛盾である。貨幣は秤量貨幣から計数貨幣となる。鑄貨は自らのシンボルとなる。これはマルクスによってもジンメルによっても認められていた。<sup>16)</sup>貨幣の機能、存在は本来的に社会における信頼による、というジンメルの命題はこの意味においては正しい。<sup>17)</sup>遂一の貨幣秤量は商品－貨幣流通の概念と実際に相違する。そしてこの地中からほりだされ精錬された金属製の流通器械の節約は社会にとってのプラスである。

この鑄貨製造権はやがて国家の手中に独占されて造幣高権をなすに至るがその動機がこの流通鑄

貨のシンボル化作用に立脚するのはしごく見易い。さて悪鑄、出目等について考察する前にもこの貨幣流通そのものが貨幣の象徴化を生む事態をここで強調しすぎることはない。国家紙幣が流通内部に受け入れられる根拠は徴税権とともに流通手段の象徴化作用にある。

# [ 註 ]

- 1) 1946年2月17日日本国政府は金融緊急措置令により新円紙幣を発行、旧円紙幣は公認の証票をしなければ無効となった。旧円預金は封鎖された。3月3日以後は旧円札旧日銀券は通用力を失った紙片になった。国家が崩壊すれば当該国家紙幣も無効となる。ドイツ民主共和国(旧東ドイツ国)は1990年10月西ドイツ(ドイツ連邦共和国)に吸収されたが、この統合においては通貨吸収が先行し、同7月東マルク(オスト・マルク)は賃金1対1(その他含み平均は約1対1.8の比率)で引換え、マルク(ドイツ・マルク)に吸収された。青木国彦『体制転換』有斐閣、1992年、第4章参照。
- 2) Cf., G.F.Knapp, *Staatliche Theorie des Geldes*, 1te Aufl. Dunker & Humblot, Leipzig, 1905, クナップ, 宮田訳, 『貨幣国定学説』有明書房, (第2版の訳, 歴史篇略), J.M.Keynes, *A Treatise on Money, The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol. No. 5, 6, Macmillan, 1971, 長沢訳『貨幣論』I II (『ケインズ全集』第5, 6巻,) 東洋経済新報社。
- 3) 国家紙幣は貨幣の流通手段機能から生じ、国家の徴税権という正統化支配権力に基礎をおくものであり、現代信用貨幣は貨幣の支払手段機能(流通手段機能から区別されるところの)から生じ、一般に債権債務関係に立つ信用制度に基礎をおく銀行債務証書であるから、両者の区別は原理上は明瞭なはずである。state money と bank money の違いである。しかし現代信用貨幣はしばしば赤字公債による公信用発行を強制され国家紙幣を代行するし、行政府の恣意的政策に服する。法制上は国家紙幣は鑄貨同様政府(日本国)発行、現代信用貨幣の方は中央銀行発行である。逆に信用貨幣まがいの国家紙幣(利付アシニア、江戸時代の

一部の藩札、宋代の交子会子関子等、次節参照)も少なくなかった。

- 4) 金銀貨幣もすでに交換価値のシンボルである、といえよう。交換価値という社会関係を担う存在が金銀という物である、というところにそもそも物神貨幣の謎があった。「……商品を一挙に交換価値として実現し、一般的作用を商品にあたえるためには、特殊な商品との交換では不十分である。商品はそれ自身がまた特殊な商品ではなく、商品としての商品の象徴 Symbol, 商品の交換価値の象徴である第三の物と交換されねばならない。したがってこの第三の物は、いわば、労働時間そのものを代表しており、労働時間の整除部分を代表する例えば紙片または皮[である]。(かかる象徴は一般的認知を前提する。それは一つの社会的象徴たりうるにすぎず、事実上一つの社会的関係を表現しているにすぎない。)……この象徴、この交換価値の物質的記号 Zeichen は交換自身の産物であり、先験的に把握された観念の実現ではない。(じっさい、交換の媒介者に使用される商品は、まずは次第に貨幣に、象徴に転化される。これが起ってしまうと、その商品の象徴がそれ自身にとってかわりうるものとなる。その商品はいまや交換価値の意識的記号となる。)」K. Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie* (1857-58), Dietz, 1953, p.63, マルクス, 高木監訳, 『経済学批判要綱』大月書店, I, 65~66頁。
- 5) 金属鑄貨の国家による本位貨幣認定はその限りではない。金銀銅等金属貨幣は国家が本位貨幣、ないしは法定支払手段に認定しようとしまいと地金の生産・需給関係他による価値変動をまぬかれず、かくて単一貨幣の地位をつねに競合金属商品に脅かされる。
- 6) 貨幣のこの国際的側面は貨幣=商品説と貨幣=国定説の根本的相違点の一つである。クナップもまた対外支払いにおける金属正貨の有用性を認める。国際通貨と内国通貨の二元論である。「国家が完全に相互に独立である以上、表券組織は国家から国家にわたってその作用をおよぼしえない」Knapp, *op. cit.*, p. 33, 前掲訳, 51頁。
- 7) 国民的鑄貨の国境外への流出、外国鑄貨の国内への流入は頻繁におこる現象である。しかしそのばあい鑄貨は地金の内実によって通用する。ソブ

- リン金貨、メキシコ銀貨は世界貨幣に使用された。中国銅貨（銅銭）は中世期日本に大量に輸入され日本の貨幣空隙をみたした。今日、ドルは世界貨幣として通貨価値の不安定な国々に入りこみ、当該国の通貨と平行して流通する二重通貨流通現象をしばしば生じさせる。今日のドルは地金にはなりえないが、ドルの価値＝購買力が比較的に安定しているので激しいインフレに苦しむ国民は自国通貨よりも購買力が安定し、為替相場がたしかな国際通貨を求める。ロシアのドル、セルビアのマルク等がそれである（94年現在のロシアではドルは流通禁止）。わが国でも住民は外貨預金を保持しうが、それは流通手段ではなく資産（投機を含む）または対外振替支払予備勘定であろう。
- 8) Knapp, *op. cit.*, pp. 9~21, 前掲訳, 14~33頁。
- 9) Cf. *ibid.*, pp. 28~31, 47 ff. 前掲訳, 42~47, 72頁以下, 参照。
- 10) ケインズは金本位制度を批判し、管理通貨を提唱するが、彼の貨幣理論は流動性と利子の理論にむけられ、貨幣の形成にはむけられない。彼は表券貨幣、国家紙幣なり銀行紙幣なりの合理的存在を承認し、すでに形成されていて自明である貨幣の果たす流動性の社会経済問題にうつる。
- 11) 例えば、林敏彦『ミクロ経済学』東洋経済新報社、228頁、参照。ただしこの公共「財」の発生、形成主体の説明はない。
- 12) サムエルソンの重複世代モデルにおける貨幣はこのパラドクスに立つ。
- 13) クナップは国家紙幣のかくす収奪、徴税権を国家の使用者、民衆への贈物である、と言う。「とくにこの貨幣〔国家紙幣—岡田〕は我々の国家にたいする債務を免除する。けだし、発行者である国家はこの支払手段をよろこんで受取ると力説しているからである。」Knapp, *op. cit.*, p. 43, 前掲訳, 66~67頁。
- 14) 新産金は生産物交換をととして流通内部に入り込む。P (G) [新産金] — C (商品) においては商品の側ではそれは販売だが、金の側では購買ではない。国家紙幣は当初から購買をもって流通内部に入り込む、というがこれも本来の購買ではなく、商品の一方的取上げであり、徴税権の発現、先取である。
- 15) 世界最古の鋳貨はリディア人が製造した、とのことだが、やがて古代ギリシャのポリス、市が貨幣を鋳造した。古代中国では春秋戦国時代、商人が銅貨を鋳造した記録があるが、私鋳が先行したのは疑いない。秦は鋳造権を掌握し、幣制を統一した。しかし、中国貨幣史はこの造幣高権の国家による確保がいかに難しかったかを繰り返し示す。漢朝は当初高権を放棄し私鋳をみとめたが、鋳貨の粗悪化から悪弊は正の官鋳造を復活、以後歴代王朝は官鋳と私鋳（盗鋳）禁止、官鋳と私鋳の平行を繰り返す。国家正統支配権といえどもこの交通、通信の不便な広大な大陸国家の中央統制力に限られたものである。それに地方政府また独自の鋳造政策をとり、地方別に取り引き慣習も相違した。この点ノルマン王朝以来造幣高権を確保しつづけたイギリスとは対蹠的である。加藤繁『中国貨幣史研究』東洋文庫、1991年、参照。
- 16) K.Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, 2es Kapitel, c, Die Münze, Das Wertzeichen, マルクス、武田他訳『経済学批判』岩波文庫、第2章, c, 鋳貨, 価値章標（記号）, *Das Kapital*, 2te Aufl., Bd. I, 3es Kapitel, 2, c, Die Münze, Das Wertzeichen, 長谷部訳『資本論』, 第1分冊, 第3章, 第2節c, 鋳貨, 価値章標, G. Simmel, *Philosophie des Geldes*, Dunker und Humblot (1900), 1958, 3es Kapitel, III, esp. pp. 164~196, ジンメル、元浜訳『ジンメル著作集』第2巻（「貨幣の哲学」I）白水社、分析篇, 第2章III, とくに240~285頁。
- 17) 「……いま受取った貨幣が同一価値とひきかえにふたたび支出されうという信仰 der Glaube が存在しなければならない。ここでも不可欠で決定的なことは「銅ではなくて信頼」〔マルタ島鋳貨の刻印——岡田〕——つまり経済圏にたいする信頼 das Vertrauen である。すなわち、われわれはある価値量を手放し、これとひきかえに中間価値である鋳貨を受取るのであるが、経済圏はこの鋳貨とひきかえに、なんらの損失なくふたたび同じ価値量を補償するであろう、という信頼である。」Simmel, *ibid.*, p. 164, 同訳, 241頁。発行者の意図を推量すればこれは信頼しすぎというものだ。この信仰＝信頼のメタルの裏は次節にみるだろう。

#### 第Ⅳ節 貨幣の水平的基礎と垂直的基礎、その相剋

貨幣商品の鑄貨への発展、国家紙幣の発行、金銀流通器械の節約、代替まで考えると貨幣＝商品説の意味、難点ともに貨幣＝国定説の意味と難点について明らかになる、と思われる。すなわち貨幣＝商品説は現実の貨幣姿態である非価値実体貨幣を説明できずかつ多貨幣可能性と単一貨幣必然の難問をかかえて、単一の国家紙幣の強制流通という直截な貨幣＝国定説におくれをとるが、だが、交換財たる商品の集合から貨幣の必然、必要を説く優位は決定的であり、国定説はこれに代わりえない。国定説はむしろ象徴貨幣における基礎を金属貨幣、物神貨幣自体の流通におけるシンボル化に求めるものであった。だから説明的にいえば、貨幣形成の交換・市場という水平的基礎と国家統合の正統支配の公共的であるが垂直的な基礎の両基礎を貨幣形成のそれぞれの契機として相対的に位置づける必要がある。貨幣＝商品説が示す貨幣と商品の同等性と対極性（価値形態の相互排他性）、一般的等価形態の必然、交換過程の矛盾の貨幣による解決＝運動と、貨幣＝国定説が示す貨幣の公共（財）側面、社会的分業発展の内部における徴税権の存在様式、貨幣制度の国民的統一への志向（貨幣の排他性の確保）、は組み合わされてはじめて貨幣形成を説明し、貨幣の歴史的運動とその実物経済との不可分の関係を説明できるものとなる。

しかしながら、この両基礎の統合はまた各国民の貨幣制度、歴史においてさまざまな組み合わせと相剋を示す。この両者の統合におけるそれぞれの比重、統合の安定と不安定、ときに両者の激しい衝突の歴史的な経過は、貨幣の進化、発展が長期の複雑な過程であることを示唆し、国家紙幣における物神貨幣の象徴化がしばしば重大な困難に直面、挫折失敗したことを示す。

金属鑄貨の歴史は平坦なものではない。金属鑄貨の鑄造は当初は私的商人、鉱山業者その他により自生的に行われ社会の必要を満たしたのであるが、鑄貨流通の含む貨幣象徴化作用そのものがやがて国家の介入を喚起するところとなる。国家は

まず支配正統化のために流通社会に秩序をうむ安定した鑄貨制度を提供しようとするが、その貨幣鑄造利益が国庫、君主の収入の源泉となることをみのがさない。貨幣の公的鑄造は鑄造費用をこえた造幣利益を生む。けだし鑄貨の正常な流通にあたってさえも額面重量の貨幣をそのまま鑄造する必要はないからである。加えて造幣高権は私鑄を禁止するが、私鑄を排除すれば金銀銅地金価格＋加工費をこえた額面重量の鑄貨の鑄造は国家造幣所の日常業務となる。鑄貨が秤量貨幣としてではなく計数貨幣として通用する限り、その差額は鑄造利益（シニョリッジ）として国庫に入る。イギリスがノルマン王朝のはじめからこの利益を確保していたのはすでに述べた。統一的技術で加工された王の刻印をおびた鑄貨は逐一秤量されずに流通手段の機能を果たし、国王に追加収入をもたらす。<sup>1)</sup> その内実に多少の、いやかなりの、疑わしさがあっても、代替貨幣がなく、また他人が受取りさえすれば鑄貨は額面で機能するから内実を調べる手間ひまはかけない。そして商品－貨幣流通範囲が拡大すればそのままに国家の鑄造利益が増加する。<sup>2)</sup>

この鑄造利益は租税収入にかわる国家、国王の追加収入をなすから、正規の鑄造利益に加えて悪鑄、貶貨は国家の抵抗しがたい誘惑となる。金銀銅内実と通用額面の差額発生はしかし国王を誘惑するばかりではない。この象徴化法則を知るものは——知らずとも経験によって——悪貨と良貨を区別するのであり、悪貨で支払い、良貨で受け取ろうとする。価値保蔵には価値実体こそ重要である。ぬけめない者は鑄貨の盗削にすすみ、偽造、私鑄にはしる。国家はこうした偽造を犯罪とみなし重罪で追求するがそれは秩序のためより国王の鑄造利益を独占するためである。<sup>3)</sup> あるいは金銀銅は地金として輸出され、外国の商品と交換される。あるいは外国から品質劣悪な外国鑄貨が輸入される。次第に表面化する物価騰貴、軽量化した鑄貨の普及はこの過程をいっそう促進する。計数貨幣であった鑄貨が次第に秤量貨幣に逆戻りする。流通当事者は逐一貨幣の選択評価をおこなわねばならず、ますます悪貨は良貨を駆逐してゆく——グレシャム法則である。<sup>4)</sup> 貨幣の垂直的基



礎はその水平的基礎と衝突する。流通世界は国家が鑄造する貨幣をもはやうけつけない。こうして限度をこせば貨幣の象徴化は成立しがたくなり、改鑄の時期がくる。国家は鑄造する鑄貨の信用を回復し、あらためて鑄造利益を確保する機会をみつける。貨幣称呼は継続維持されるが、その価値内実はいり下げられ新水準で金銀銅貨が鑄造される。今度は国家は威信をかけてこの内実をまもる。財政の均衡が約される。もちろんこれが実行される保証はなに一つない。全過程がふたたび、またび繰り返される。イギリス中世貨幣史は悪鑄、盗鑄、改鑄による持続的なポンド内実の低下の歴史であった。11世紀にはほぼ1ポンド重の銀から240個のペニー貨が鑄造されたのに、エリザベス女王が即位した16世紀末には1ポンド重の銀から744個のペニー貨幣がつくられていた。<sup>5)</sup>

古代から中世にいたる金属鑄貨の流通は不断に貨幣の両基礎の相剋、衝突をまねきかえって不安定で非効率的な制度であった。そして国家による金属貨幣の鑄造は、悪鑄、盗鑄、改鑄の反復を度外視しても金銀銅法定比価と実質比価の差等からする混乱、二重価格を生むことになり、単一貨幣の要請に応えるものでもなかった。この混乱、非効率はまたしばしば外国との間の金銀銅地金、鑄貨の流出入と結び付き、米・布他の物品貨幣への逆行を生んだ。<sup>6)</sup>

国家紙幣、この紙製の鑄貨ならば地金属の費用もかからず、製作費もわずかである。流通界がのみこみさえすれば国家にとってこれは鑄造利益を追求するよりはるかに手軽である。先にみたように国家紙幣は本質上徴税票であるが、流通界の受容には金属貨幣の象徴化作用の歴史的経験が必要である。紙幣発行は鑄造原価をほとんどゼロとすれば国家にまるまるの利益をもたらす。ただし金属流通器械代替量を超えて発行されれば、物価騰貴、インフレーションをまねいて通用力への信用を失うであろうから、国家はその回収をつねに心がけねばならない。国家紙幣の回収能力を超えた発行の誘惑は鑄貨製造よりも国家にとって抵抗し難く麻薬のようにやめ難い。この紙幣価値——購買力、商品価値支配力——の安定に失敗すれ

ばついに国家の正統化暴力による強制力も流通世界の拒否を覆すことはできず、国家は面目をうしななって紙幣発行を停止するか、権力支配そのものが崩壊する。

国民的金銀鑄貨の長期間の経験をもち金本位—国際金本位制度の祖国となるイギリス貨幣史は貨幣理論に豊富な素材を提供するが、国家紙幣の祖国は中国である。紙が古来中国の産物であったのも一因である。モンゴルが中国に開いた元朝(1271—1368年)は国家紙幣、交鈔をもって正規の貨幣とし、中国伝来の銅貨(および銀金)の使用を禁止した。元代は貨幣史上は紙幣の時代であった。<sup>7)</sup>しかし紙製の貨幣が流通世界に受容されるには中国でも歴史的経験を要した。それが先行する宋朝(北宋960—1127年、南宋1127—1279年)における各種の紙幣の自主的流通にあった。そこには信用の発達や銅銭鉄銭の不足、手形の流通などの原因があった。交子、会子、関子等がそれらの紙幣であり、あるいは銅銭預り証、あるいは官民発行の支払・送金約束手形であった。民間での自主的な紙幣流通が先行したのであるが、やがて中央、地方の政府も紙幣を発行する。これら国家紙幣は税収不足、銅銭不足代替物であって兌換保証ははじめから難しかったから、流通世界に受容されたり、拒否されたりを繰り返したが、やがて宋代に紙幣流通は部分的な定着をみた。<sup>8)</sup>通貨の主体は官鑄、民鑄の銅貨(および鉄銭)であり、銀の流通も次第にひろがっていた。もちろん各種物品も交換媒体に使用された。

元朝は紙幣交鈔をもって銅銭に代え、国家紙幣を唯一の貨幣とし、伝来の銅銭の使用を禁止、銀使用も禁じ金銀を官に収集しようとした。これは産銅不足、銭不足、流通の拡大による通貨需要の増大の状況を利用して幣制度統一をはかり、新王朝の権威確立とともに紙幣発行により国家支出を賄おうとしたためである。紙幣流通の下地は存在した。<sup>9)</sup>国家紙幣発行利益は金属流通器械代替にくわえて物価騰貴の負担を民衆、流通世界に強要することにより増大する。交鈔印造による紙幣増発は限度なく行われた。<sup>10)</sup>元朝の紙幣流通においてとくに興味あるにはそれが金銀の安価収公利益の

みならず、塩・茶・酒・鉄等必需品専売利益と結合していたことである。とくに塩の専売利益は大に交鈔の回収と金銀収入により国庫と国家紙幣流通に大いに貢献、貨幣歳入の8割に達した時もあった。<sup>11)</sup>しかし軍費、官僚、支配者秩禄出費のために紙幣増発止むことなく、過重、過酷な塩専売(塩課)、各種租税の過重、物価騰貴に民衆の怨嗟はたかまり元朝内紛、天災、漢族の抵抗、反乱から元朝は滅亡する。市古氏はこの滅亡の積年の原因を財政崩壊、紙幣増発にあったとする。<sup>12)</sup>国家紙幣の増発、物価騰貴、そしてついにはハイパーインフレーションの破局は歴史に枚挙のいとまがない。近代ではフランス革命期のアシニア、アメリカ南北戦争期のグリーン・バックが名高い。<sup>13)</sup>

国家が持つ貨幣にたいする特殊な利害関係は貨幣制度を安定化するよりはより不安定にする。本来的にはその徴税権限内で機能すべき紙幣が財政赤字のために際限なく増発されれば商品世界に拒否されて貨幣制度がくつがえる。金属鑄貨制度も不安定であるがそれは国家紙幣制度のそれよりはるかにましである。中国は明朝以後国家紙幣本位から離れ、銅鑄貨中心からやがて銀(銀両→洋銀→銀元)を中軸にした貨幣制度へと遷移する。<sup>14)</sup>イギリスは17世紀にいたって鑄貨制度を安定させるが、18世紀初金貨鑄造主体へ切り替えて金本位制度を採用、それが同時代における信用制度の発展、金兌換信用貨幣の普及等と結びついて交換社会、商品流通世界の安定をもたらした。資本主義勃興に照応する安定的な貨幣制度が形成されてくる。<sup>15)</sup>

すなわち、産業資本主義は生産過程の資本主義的編成に基づく利潤＝経済余剰の追求を主軸とするが、不安定な貨幣制度、価値増殖基準の予測し難い変動、国家の恣意の不断の介入は、貨幣計算の合理性と資本合理性を妨げる。流通過程は価値形成＝剰余価値形成の主要な舞台である直接的生産過程の歴史的準備であり、要素購入の場であり、またそれに役立つ結果的な舞台にすぎない。私の(a)(b)(c)のシェーマでいえば、(b)は(a)の安定的な進行を求める。原始的蓄積期をすぎれば安定した(a)が(b)を先導し、反復的な(b)、

すなわち産業資本の生産過程、がその反復を実現する(c)、すなわち産業資本の流通過程、流通ネットワークを創造する。<sup>16)</sup>無際限に膨張する傾向をやどす国家紙幣は御免であり、計数か秤量か、比価変動による金か銀かの右往左往、流通領域の画期的拡大にともなう金属流通器械負担の膨張に悩む単純なる金属鑄貨制度もますます効率的でなくなる。こうして漸次的に近代信用制度を基礎とする信用貨幣の時代が到来し、国家紙幣を排除し、金属鑄貨流通を従属的位置におとしめる。<sup>17)</sup>

しかし、信用貨幣の成熟はまったく近代産業資本主義の成果であるけれども、いわゆる原生的信用関係は商品流通とともに発生し、貸借関係、債権債務関係は古代の高利貸資本の時代から存在する。信用貨幣において注目すべきはまず遠隔地への送金手形の発生であり、掛売―後払における債務証書、約束手形、為替手形の発生である。<sup>18)</sup>また多様な鑄貨相互の両替業、貴金属加工業からは貨幣取引業がおこり、金銀の預り証も出現し、やがて商業、産業等の営利活動への資本の貸付が国王、国庫への貸付とならんで金融業者、銀行、貨幣取引業の経常的な事業活動になってゆく。

#### 〔注〕

- 1) もっともあらゆる国家が造幣高権を掌握しうるわけではない。中国の周辺国家、古代の日本は中国をまねて鑄貨を官鑄(主に銅銀)したが失敗し、中国貨幣の大量輸入国となった。銅銭に不足する中国歴代王朝はこの流出をしばしば禁止したが流出をとめることはできなかった。

日本の貨幣官鑄は和銅銭702年をもって最古とするが、いわゆる皇朝十二銭(708-957年)の鑄造をおこなったのみで、官鑄は徳川家康の慶長金銀鑄造1602年まで中断された。古代、中世の日本の政権は造幣高権を掌握し、もってその財政基盤を確保し幣制を統一して正統支配を誇示する力量がなかった。官鑄鑄貨の質は悪くかつ不揃いの上、官は不当に高価な通用力を求めたので不評だったし、鑄造事業の採算、統制はとれなかった。私鑄の悪銭が流通したが、この間ひきつづいて発達した商品流通は稲・米穀・絹・布帛等の物品貨幣に

媒介され、中世には大量の中国銅銭——唐・宋・明銭とくに明の永楽銭——が流入、日常の貨幣となった。うち永楽銭には日本での模鑄も少なくなく、永楽金銭、銀銭は豊臣政権の鑄造による。戦国期金銀の産出が急増し地方権力、金銀両替・加工業者の座による鑄造が盛んに行われた。「黄金のジパング」の時代である。徳川権力による造幣高権の掌握は国内の政治的統一とともにこの経過に接続する。小葉田淳『日本の貨幣』至文堂、1958年、日本学術協会編『図説・日本貨幣史』展望社、1991年、岡崎次郎『貨幣論綱要』法政大学出版局、1965年、東洋貨幣協会『貨幣』、第3巻、天保堂復刻版、1987年、56～71頁、参照。

- 2) 正規の品目・重量と実質品目・重量の差10%程度のほぼ正常な範囲では磨損は民衆に感知されない。巨額な取引を扱う商人にとってはそうではない。A. Feavearyear, *The Pound Sterling-A History of English Money*, Oxford Clarendon, 1963, p.18. 1652年流通イギリス鑄貨は名目より平均20-30%軽かった。1695年国庫が3ヵ月間に受け取った銀鑄貨57,200ポンドの重量は正規重量の51%しかなかった。ibid., pp.92, 124.

イギリスの単位銀金あたりの鑄造利益は同書付録, pp.435-436, 参照。

- 3) アン・ブーリン, トマス・モアの処刑, 英国教会のローマ法王との絶縁と歴史に悪名をはせたチューダー朝のヘンリーⅧ世は、悪鑄でも格別の業績を遺した。彼の時代は貨幣の「大減価」の時代であった。彼の悪鑄のあの手この手はフィーヴィヤーイヤーに詳しいが、王の収めた鑄造利益は, ibid., p. 62に表に掲げられている。

日本では悪鑄といえば元禄改鑄の荻原（近江守）重秀が新井白石の糾弾によって名高い。「白石建議, 四, 五」『新井白石集』（近世社会経済学説体系）, 誠文堂新光社, 1936年。時の勘定奉行荻原は幕府財政難を打開するため貨幣の品質を貶して収入の主要な源泉とした。すなわち慶長小判, 1分判の金含有率84%を57%に, 丁銀, 小玉銀では慶長銀含有率80%を64%に貶した。また新鑄の銅銭も不良で「荻原銭」とよばれた。つごう元禄8-16年（1695-1703年）間に幕府は452万両の利益をあげた, という。児玉幸多「荻原重秀」『国史大辞典』吉川弘文館, 1979-93年参照。この数字には疑問

があるようであるが、鑄造利益は莫大であったと推察される。旧貨（慶長金銀）は20%まで増歩をつけて強制回収をはかったが古金銀は退蔵された。小葉田, 前掲書, 125-144頁, 作道洋太郎『近世日本貨幣史』弘文堂, 1958年, 116-118頁, 参照。

荻原・新井の対立は経済政策上のインフレーションистとデフレーションистの昔から現代にいたる対立の江戸版である。

- 4) グレシャム T. Gresham, c. 1519-1579, はロンドンの商人・銀行家・金匠でエリザベスⅠ世の鑄貨安定策の助言者であり, そこから「悪貨は良貨を駆逐する」という法則を樹立した, となっているが確証はない。この法則は古代ギリシャ以来周知のことであった（アリストパネス『蛙』）。cf. “Gresham’s Law”, “Gresham, Thomas”, in *Palgrave’s Dictionary of Political Economy* (1894-99), reprinted, 1963.

- 5) 鑄貨安定を掲げる改鑄は鑄貨内実の減少を追認する他なかった。改鑄で元の内実への復元をめざしたものは1299年以来, 1696年の復鑄までなかった。

チャールズⅠ世の暴政を革命によって覆してからの市民はもはや絶対君主による鑄造利益（シニヨリッジ）の収奪を認めなくなっていた。ウィリアムⅢ世治下, 勃興する商業・産業・金融資本家階級が安定的な貨幣制度を求めインフレーションにきりをつけるべく, 磨損・偽造・盗削鑄貨の整理, 額面重量の復元による通貨整備を要請した。蔵相ラウンズは慣行に従い鑄貨の軽量化の事実を追認する改鑄を求めたが, 債権債務関係の継続性, 債権者利益を強調する市民階級の代弁者ロック等に押しきられ, 復鑄費用の全額を国庫で負担して改鑄を実行した。負担金額は270万ポンドであった。盗削防止のギザつき鑄貨（銀）milled money が金銀比価の関係から新規鑄造とともに選別され溶解されて大陸へ輸出されるので, 改鑄は正貨輸出禁止をともなった。銀板1オンスから5シリング4ペンスが鑄造され, 銀1ポンド重から744個のペニー貨がつくられた。銀鑄貨の内実はいはばエリザベス朝の水準（銀1オンス・スターリング=5シリング, 鑄造価格=4シリング10.5ペンス, 1560年）にもどった。

他方, 1694年イングランド銀行が設立され銀行

券発行が認められ、国家は低利で借入りが可能となるが、同時に各種事業資本家も低利の金融をえ事業の拡張、資本の蓄積をすすめた。イングランド銀行も大いに儲けた。国家はつましく歳入内（プラス公信用）で暮す。貨幣を創造し、それを魔法のごとく殖やすのは国家の仕事ではなく資本家の仕事となった。Cf. Feavearyear, *op. cit.*, pp. 119~149, 船山栄一他『新版・西洋経済史』有斐閣, 1976年, 114~115頁, 参照。

- 6) イギリスはローマ貨幣をうけついで銀貨主体の貨幣流通から銀金両鑄貨の混合流通を経て（銅貨は補助貨幣）金鑄貨流通に至ったが、ヨーロッパ大陸諸国も銀鑄貨流通から銀金鑄貨流通を経て、19世紀最後の四半世紀に金本位制度に移行する。
- これにたいし中国は秦以来明初まで——元朝の紙幣流通を挟んで——銅鑄貨を主軸貨幣としてきたが、鉄銀金も貨幣として使用されていた。ところが明代に至り産銀が増加し、鎖国（海禁）にもかかわらず進貢貿易、遠征、密貿易、南海貿易、等によって外国銀が流入し、とくに、16世紀アメリカ大陸産の銀もヨーロッパ商人を介して大量に流入、銀価値も低下し、しだいに銅銭とならんで通貨——ただし秤量貨幣である銀両——となり、さらに通貨の主体となり、以後清代を経て中国は銀本位国となる。日本からも16世紀半以降かなりの銀が中国へ流出した。ヨーロッパ商人による東洋貿易においても日本の銀輸出は重要であった。当時日本は金ではなく銀を大量に輸出していた。市古尚三『明代貨幣史考』鳳書房, 1977年, 小葉田淳『日本金銀貿易史』法政大学出版局, 1976年, 1~76頁, 参照。16世紀半以前には日本から金が輸出され中国銅銭と交換された、と同書（3頁）はいう。

古代中世の日本ではすでにみたように自国の金属鑄貨流通は定着せず、もっぱら中国銭（銅貨）と物品貨幣が流通を媒介したが、徳川時代の貨幣制度は主軸が金銀銅いずれともきめかねるものであった。いわゆる三貨制度である。江戸の金目（価値基準、尺度）、大坂の銀目と二都市で尺度貨幣が相違し、また庶民は銅貨と若干の銀、商人は銀と多少の金および信用貨幣である両替商手形、大名などの贈答用の金と階級別にも使用貨幣がちがっていた（江戸時代の紙幣については註18参照）。

小葉田, 前掲書, 1958年, 第4, 5, 6章, 三上隆三『円の誕生』東洋経済新報社, 1975年, 第2, 3章, 参照。

いずれにしても金属商品＝貨幣間の公定比価と内国実質比価, それらと世界市場, 外国市場での相対価値は相違するから, 悪貨は良貨を駆逐するグレシャム法則と金銀銅の流出入の運動は結びついているし, 一体でもある。前掲各書, 参照。

- 7) 以下, 市古尚三「元朝の交鈔専用制度について」『拓殖大学論集』第5号, 1953年, による。また同, 前掲書, 加藤, 前掲書, 参照。
- 8) 宋代の紙幣流通の定着については, 加藤, 同書, 参照。市古氏は唐代（618-907年）を本格的な金属鑄貨（銅）時代とし, 宋代を鑄貨・紙幣並用時代, 元代を紙幣専用時代, 明代（1368-1644年）を紙幣・金属貨幣（銅鑄貨, 銀両）並用時代, 清代（1916-1912年）を銀貨幣（地金から銀鑄貨へ）時代, と特徴づける。市古『明代貨幣史考』393~398頁, 参照。もちろん, インドに国家なく, 中国に絶対の皇帝権力ありといえども, 歴代王朝が広大な中国の支配版図を十分な統制力で統治したことはなかった。異民族王朝, 元朝とくにしかかりで民間, 地方では銅銭, 銀の使用はやまなかった。インフレ, 紙幣減価が甚だしくなればますますそうである。
- 9) 市古氏は元朝の紙幣専用制度の発足の理由に, 1, 華北における銅材の絶対的欠乏, 2, 紙幣発行の営利性, 3, 秩禄支出の過大, をあげている。市古, 前掲論文, 前掲誌, 25~45頁。紙幣増発は世祖フビライ（忽必烈）の日本侵攻（元寇1271, 81年）, 他の外征と期を一にするから, 軍事費支出は発行の大きな原因である。やがて物価上昇が先行しインフレの悪循環に至る。
- 10) 元朝の紙幣発行額の記録では, 元末（寧宗以後）を除き総計, 5,496万錠, 27億4,800両（1錠=50両=50貫, 1貫=千文）に達した。前後の金属貨幣流通量がわからないが膨大な額である。偽造紙幣もすこぶる多かった。市古, 同論文, 47~54頁。元末1351年の記録に「物価は十倍を越え, 皆は物物交換を行う」とある。
- 11) 国家紙幣は紙幣価値（商品購買力）維持のためには回収, 還流が絶対に必要である。元朝もこの回収には力を注いだ。回収の源泉はいうまでもな

く租税だが、租税は中国古来の塩他の専売事業が稼ぎ出すこととなる。これは必需品の高価販売で税と同じであり、元朝の紙幣専用制がとまれ機能したのもこの塩の専売によるもので1339年には貨幣歳入の82.3%を占めた。市古、同論文、63頁。

中国古来の塩鉄の専売制度については『塩鉄論』中国古典選書、山田勝美、対訳・解説、明德書店、1967年、参照。同書は貨幣、財政、経済一般を論じてやまず、現代の計画（統制）と市場の対決論ともいえる世界の古典である。

12) 市古、同論文、68頁以下、参照。

13) 1789-96年のアシニアはフランス革命期の短命な国家紙幣であった。フランス革命はもともと王室財政危機からはじまるが、革命政府はその赤字財政を継承し、没収僧院財産、土地（国有財産）を担保に紙幣を発行した。当初はアシニアは額面1,000リーブル5%利付公債として発行されたが、すぐに利子なし小額面通貨が発行された。それでも1720年ローの銀行、銀行券の大破綻から紙幣不信は強かったのでアシニアは国有財産売却 *vente des biens nationaux* ごとに焼却、破棄された。しかし革命政府の財政赤字はこの紙幣増発に依存せざるをえず、金銀鑄貨、外国為替にたいし減価が始まる。

ホートリー記すところのアシニアの歴史では、紙幣価格（価値）は91年11月額面の82%、92年6月57%、年末72%、93年1月51%、（5月ジャコバン独裁）、8月15%、最高価格令、金銀価格公表禁止、王像印刷アシニア没収、アシニア拒否死刑の諸措置でもち直し、11月48%、94年6月テルミドルで、最高価格令廃止、金銀での売買は進行し、11月24%、鑄貨流通はパリ近郊まで復活、95年2月17%、6月10%以下で、取引は鑄貨・紙幣の二本建という末期現象となる。アシニア終結が政府・議会でも論議されるが、ジャコバンは「革命の大義」にかけて反対する。商人は金属貨幣を使用するが、政府は紙幣を見切れない。96年初には5%、4%、ついに2%に減価、税金に集める費用にもなくなり、3月政府は新紙幣マンダを通用させようとしたがこれはアシニアにも代わりえず失敗、1797年2月令で額面の1%で納税、国有土地購入権を認める条件で、アシニアは歴史から消える。cf., R. G. Hawtrey, *Currency and Credit*,

Longmans, 1928, chap. 17.

当時は金銀鑄貨が大量に存在し、保蔵され、ひそかに通用したから紙幣減価はほとんど直接に金貨、銀貨の紙幣価格に表現された。

14) 明末清初の租税銀納を定めた一条鞭法は銀貨幣の流通拡大を反映するとともにその流通を全国にうながしたが、鑄貨鑄造にはいたらず、秤量貨幣の銀両が主体であり官の鑄造する貨幣はひきつずいて銅銭であった。しかし世界市場との接触、貿易が盛んになるとともに欧州、米州からの洋銀の流入が増加し、沿海地方を中心にスペイン銀貨、メキシコ銀貨、イギリス銀貨が流入、中国で貨幣の諸機能をはたした。1圓は洋銀を取引に使用した商人が1ドル銀貨1個をよんだ名称である。清朝が銀貨幣の鑄造を行なって造幣の国民主権を主張したのはようやく清末の1889年になってからである。この中国の本位貨幣が銀元である（元は圓と同じ発音に由来するが、ドルを美元と表現するようにより抽象的に貨幣単位を表わす。）

しかし統一的国家の造幣高権にはなお遠くおよび、銀本位制度を継承した中華民国（1912年成立）も高権を宣言し「国幣」創設を志向したものの乱雑きわまりない貨幣制度の統一を実現したといえるのはようやく蒋介石政府による1935年法幣（銀兌換銀行券）制度である。民国初期の混乱をきわめた中国貨幣の状況については、久重福三郎『支那貨幣に就きて』上海同文書院研究部、1924年、参照。法幣による統一については次節の註記を参照されたい。

だが、その時すでに日本は満州に侵攻、満州国なる「国家」を捏造していたし、中国侵略を進め、他方世界は国際金本位を停止し、恐慌と不況のただなかにあった。

中国貨幣史は貨幣がいかに国家の政治的な正統支配の状況、全国版図の実質的掌握の度合に左右されるかを示す。貨幣論は国家論と切り離せない。

15) 15世紀末からのヨーロッパ人による大航海、ヨーロッパ商業による統一的世界市場の形成は、南北アメリカ大陸の開発、略奪、植民地化の悲惨をもたらしつつ世界史に大きな衝撃を与え、現代にいたる非可逆的な結果を生んだが、これを狭くアメリカ産金銀の欧州、アジアへの大量流入の現象に

かぎってもその貨幣史におよぼした影響は測りしれぬものがあつた。まず銀流入は欧州における金銀比価を変動させ、16世紀に1対9であつたものが17世紀初には1対11、18世紀前半には1対15となり銀の相対価値を低下させた。ところでイギリスの当時の輸出商品毛織物はアジアに売れず、茶他のアジア産品の購入には銀を要した。そしてアジアでの比価はほぼ1対9ないし10であつたから東インド会社はアジア向けに大量の銀を積み出した。イギリスで多少でも金が過大に評価され銀が不利になれば、金の輸入、銀の輸出が生じた。そしてこのころのイギリスは先述の鑄貨復元により完全重量鑄貨が豊富に流通内部に存在していた。当時ギニー金貨（22カラット129.4グレイン）が22シリングで過高評価で流通からは完全重量銀貨は消えはじめ、金貨が残った。当初、金貨はなお庶民の通貨ではなかったがある程度の資本家には普通の貨幣になっていた。金貨は次第に流通媒体の主体をなす傾向が生じた。こうした現象は金銀ないし複数金属鑄貨流通に避け難い困難である。

時の造幣局長官ニュートンはギニー貨価格を21シリングに引下げるべし、と提案、1717年これが承認され、世紀半ば金貨幣はほぼ完全に銀貨に代替した。22カラット金1オンス＝3ポンド17シリング10.5ペンス（純金1トロイ・オンス＝84シリング11.5ペンス）の200年以上にわたるイギリス的かつ世界的な基準の誕生である。18世紀なかばにはイギリス流通貨幣はもっぱら金貨となり、金本位制度はアメリカにみられたような社会的対立なしに自生的に受け入れられた。cf., Feavearyear, *op. cit.*, chap. 7.

フリードマン『貨幣の悪戯』で分かるように、金・銀のどちらが貨幣でどちらが地金属商品か、金本位制度か銀本位制度か、はアメリカ人には現代でも忘れ難い大問題である。もちろん流通世界における複数通貨の鑄貨代替の基準は現実比価（市場比価）と法定比価の大小という単純な法則なのだが、その交替の信用、物価への影響を考慮すると事態は単純ではない。

- 16) 岡田裕之「経済原論の再出発のために。政治経済学新原理は可能か、…」上下、本誌、第28巻4号、第29巻2号（1992年1月、7月）参照。
- 17) 徳川封建政権を倒し、近代国家建設をめざす明

治政府も幣制統一にとりかかる。1872年、政府は金本位制度を採用し金銀銅各種鑄貨の整理統合と各藩の多様な藩札整理にとりかかるが、財政基盤はなく、しかも増加する支出のため政府紙幣発行にふみきる。太政官札その他の紙幣がそれである。とくに西南戦争の出費は大きく70年代末よりインフレーションが進行した。新設の国立銀行券また不換券で政府紙幣と同じであつた。かくて資本主義の発展、外国との貿易のためにも紙幣整理が急務となり、松方財政による緊縮、増税、公債他、産業育成、輸出促進策がとられ、デフレ政策の強行により86年ごろ紙幣減価が終了した。この間金銀比価の関係もあり金貨が流出、金鑄貨流通の制度は成らず、かえって銀貨が幣制の中心となり銀本位の観を呈した。また政府は欧米の産業制度、信用制度の移植、定着に懸命で1882年日本銀行を設立、兌換銀行券を発行させ、日銀に紙幣整理を実行させた。一応の貨幣制度の安定をみるまで維新以来約20年の年月を要した。

国立銀行の失敗と日銀による貨幣制度安定化の成功は、信用貨幣の発行主体である中央銀行が国家財政から独立し、自主的な民間の信用貨幣流通に立脚するものとならねばならないことを示した。薮見誠良『日本信用機構の確立』有斐閣、1991年、参照。

インフレーションが資本主義発展をさまたげるのか、デフレーションがその確立を促進するか。ここではただ安定的な国民的貨幣制度が産業資本主義の正規の発展のために不可欠である、ということだけを強調しておく。

国家紙幣整理は19世紀、産業資本主義の世界的な発展の時代に入ると各国で追求されるが、オーストリーの紙幣整理は100年近くかかった。戸原四郎「ヒルファディングの貨幣論の現実的背景——オーストリーの通貨事情との関連をめぐって——」『社会科学研究（東京大学）』第28巻第4-5号（1977年）、参照。オーストリーにおいてある時期不換紙幣が銀鑄貨にたいし増価（打歩）を示したのは興味ある事実である。紙幣整理とともに1870年代国際金本位制の普及に応じて銀市場価格が急落したのが原因である。

- 18) 江戸時代には大坂を中心にした国内市場が発達し流通機構も整備されてくる。その基礎の上に信用

制度が発展し、両替商を軸に送金為替手形、振り手形（小切手）、約束・引受手形等各種の信用貨幣が出現、広く流通した。宮本又次『日本商業史』大原新生社、1971年、作道洋太郎『近世封建社会の貨幣金融構造』塙書房、1971年、参照。

他方、藩札という国家紙幣タイプの領国貨幣も盛んに流通した。この藩札は幕藩体制という政治権力と経済圏の二重構造に照応するもので、幕府は造幣高権をにぎって金属貨幣を鑄造し、各藩は藩内の貨幣流通をなるべく紙幣ですまし正貨を引換準備金および藩間交易（貿易）用に保持しようとした。藩札発行はもちろん藩の財政難対策であり、藩は紙幣を強制力をもって流通せしめたが、小額良貨の不足が著しかったから、その代替の面からも受容された。さらに、藩札は原則として銀他（ときに米、炭）と兌換さるべく引換準備金（藩内産物売上代金を含む）をもって発行された。ただしこの兌換は不確かで、銀から札へは割増し、札から銀へは割引きであったり、藩札濫発により大幅割引きであったり、不払いであったりして札価はしばしば大幅に下落した。また藩当局は信用ある札元を利用したり、租税、商品売りさばき、専売等で回収をはかった。藩札での利子付貸付も行われた。民衆に通用を拒否された場合もある。いずれにせよそれは信用貨幣と国家紙幣の二面性を持つ貨幣であった。このほかにも各種の私札が発行され流通した。作道、同書、竹中他『日本商業史』ミネルヴァ書房、1965年、122～126頁、国立資料館『江戸時代の紙幣』1992年、参照。

藩札は江戸中期には比較的価値は安定していたが、末期には藩札は濫発され信用を失っていた。藩札は明治政府が継承整理したが、1877年に藩札は244種その他紙幣を含め紙幣は1694種が存在した、という。維新新政府の太政官札の不評は藩札の不評をうけついだが、太政官札は同時の全国的紙幣であり、政治における廃藩置県に照応した。藩札整理については、前註および作道、前掲書、1958年、281～301頁、参照。